

遠野へ

晩秋の一日、私は車で三陸海岸から遠野への道のりを辿った。大船渡からいったん内陸に向かってまっすぐ西に進み、住田町からは世田米街道とよばれる国道を北上した。

この道は予想以上に快適なドライブコースだった。二車線ながら余裕のある側幅をもつ道が、北上山地の山あいを縫い、谷川に沿ってゆるやかなカーブを描きながら続いている。すれ違う車はほとんどない。道の両側に時折集落や人家が見えるだけで、周囲はすべて折り重なるようにして連なる山々である。だが道の走る谷の底は意外に明るく、開放感がある。両側の山腹では植林された常緑樹を縁取るようにして、落葉間近のもみじや漆の葉が、低い高度から降り注ぐ日の光を浴びて深紅に照り輝いていた。

道はやがて谷間を離れ、山腹に添った登りに変わる。上り詰めた先にはトンネルがあった。闇を抜けると、視界が開ける。遠野盆地である。伸びやかに水田が広がる平野のここかしこにカラマツや雑木の林があり、木立に囲まれた家々が散在している。北に向かって車を進めると、盆地を隔てた彼方では、山頂にうっすらと雪をいただく薬師岳と早池峰山が存在感ある姿を誇示していた。

遠野市郊外でバイパスを市街地と逆方向に折れると、私は最初の目的地である山口のデンドラ野に向かった。刈り入れの済んだ田んぼに沿った人気のない農道を、目印を探しながら、スピードを落として進んだ。車に驚いて、落ち穂をついばんでいた雀の群れが、刈田の稲茎の間から一斉に飛び立った。その様子が、冬の嵐に吹き上げられる落ち葉のようにみえた。

山口の集落は、六角牛山の北東の山裾に切れ込んだ一つの谷の内にある。遠野市街

の東に位置する六角牛山は、北の早池峰山、西の石上山とともに、『遠野物語』では女神の棲む山とされている。

「デンデラ野」の標示を見つけた私は、農道脇に車を止め、案内板に従ってわだちの刻まれた急な坂道を登った。道はすぐに牧草地を思わせる、開けた広い草地に飛び出した。ここが山口のデンデラ野である。

草地は南に向かって緩やかな登り傾斜になっており、木製のベンチと新しい案内板がぽつんと置かれている。草地の外れには「でんでら野」と墨書された朽ちかけた角柱が立っており、その先は蕎麦の畑になっていて、枯れた茎が固く黒い実を付けていた。目を上げれば、カラマツの木立の彼方に、六角牛のもっこりとした稜線が天と地を限っていた。

私は草地に足を踏み入れた。ここからは、谷に沿って点在する山口の家々を望むことができた。平坦な谷を挟んだ向こう側の山の斜面には、『遠野物語』の文章にも見える「ダンノハナ」とよばれる地があり、いまは共同墓地になっている。この地に立つと、「蓮台野」と「ダンノハナ」が「相對」しているという、物語の表現のリアリティを実感できる。

谷は北西の方角に向かって口を開いており、そちらに目をやれば、収穫の済んだ田畑が波打つように連なる風景が広がっている。小烏瀬川を隔てたはるか彼方の山際には、コンセサマで知られる山崎地区の集落が望まれる。

私は目をつむると、かつて老人たちがここで集団生活していたという、そのころの情景を想像しようとした。けれども、どうしてもその様子を思い浮かべることができなかった。代わりに、北からの風にかすかに混じる藁を燃やす臭いが、幼少の頃育った山村の光景を脳裏に甦らせた。